

2章 世界帝国の時代

ヘレニズムの時代(P43)

マケドニア王アレクサンドロスが帝国を作り上げ、後にプトレマイオス、マケドニア、セレウコス等の王朝に分割する。東方に移住したマケドニア人、ギリシャ人によって、新たなヘレニズム文化が生まれた。

政治を市民の共同行為として営むというポリスの条件を失ったヘレニズム世界において、人々の政治生活を規定したのは、ポリスではなく、アレクサンドロス帝国、又は諸王朝といった、国王を頂点とする集権的な国家であった。政治は最早、人々の経験から離れ、権力者の問題と化した。政治的自由を見失った時、人々の精神は政治の世界を離れ、精神の安定を求めて、別の価値を探求する。そこでポリスの構成員としての「市民」ではなく「個」としての人間のあり方が問われ、更にヘレニズム文化を紐帯として世界大に拡大した共同社会の構成員としての意識、乃ち世界市民の意識であった。

このとき、政治と倫理の結合は断ち切れ、倫理学は哲学的探求の主題となる。

キュニコス派と非政治・反文明の思想(P45)

ポリスの没落後、非政治、反文明の主張をいち早くしたのはキュニコス派であった。彼らは、人間の目的は徳に従って生きる事であり、幸福である為の条件と説いた。然し、徳と幸福はポリスや文明との関わりから解放された個人の生活実践における禁欲、質素、自足の中に合った。

エピクロス派と個人主義の倫理(P47)

エピクロスは哲学に人々の魂の病(苦悩と恐怖)の治癒を求めた。そこで、哲学の一部門である、自然アタラクシア学は人間の苦悩の原因を除去して「魂の平静」を獲得する為に行われるとした。この立場に立てば、宗教、神話、占いは徒に人々を恐怖に煽る不正である。彼はデモクリトスの自然学に倣い、人間にとって最大の恐怖であった死を単なる原子への解体であると説いた。

人間が従うべき規範を見出しえないこの宇宙像においては、快と苦を選択、忌避し、自らの幸福を目指す個人主義の倫理であり、この倫理においては、政治は最早積極的な意義を持ちえない。

ストア派と世界市民主義

一方、ストア派は人間の幸福の条件を、神の理性が支配する自然との一致に求め、厳しい倫理を説く。生の目的は「自然と一致して生きる」こと。魂の平静を攪乱する情念を立ち、自らの理性によって認識しえた秩序の必然性に生きる事がその意味である。

更に神の理性によって秩序づけられた世界を一個のポリスとしてみるようになった時、これはコスモポリタニズム世界市民主義を導く。

共和政末期の危機(P59)

一方、ローマ帝国は当方世界を征服し、莫大な戦利品、富、奴隷を得た。然し元老院議員を中心とした支配層による奴隷制大土地経営が促進され、ローマ軍の主力を成していた中産農民は、経済的負担や大土地経営に圧迫され、無産市民として都市へ移住することになった。こうして自由な民会も民衆煽動家に操作され易い無産市民によって占められる。市民軍は最早職業兵士へと変わる。

国家の定義と法の原理

キケロはこの共和政末期を生きた人物である。ストア派に影響を受けた彼は、人間には、感覚を通じて得られた知覚を理性的推論によって一定の認識へと組み立てる共通の能力があるとし、その本性に相応しい法を認識して、共有できるという意味で社会性を本性にと言う。これに基づき『国家論』において、「国家とは国民のものである。しかし国民とはなんらかの方法によって集められた人間の集合ではなく、法についての同意と利益の共有によって結びついた多数の人々の集合である」と説く。

3章 キリスト教共同体と政治の世界

イエスの宣教(p69)

イエスの教えでは、社会的地位や身分、富といった現世的価値は、信仰や信者の人格の価値、内なる魂の価値と無縁とされ、信仰の躰きとなるものとされた。故にその教えは疎外され、差別されていた下層民衆に受け入れられ、現世超越的な永遠の生命を約束し、慰め、希望を与える。

然し、終末への不安からアナーキーへ傾く信者を信仰に留めたり、皇帝崇拝と対決したりした後、キリスト教はローマ帝国唯一の国教という地位にまであがる。支配者の宗教となったキリスト教は、

教会内部の論争を集結し、政治への無関心を維持する事ができなくなった。キリスト教の立場から政治や国家の問題を問うという課題を引き受けたのが、アウグスティヌスである。

自然秩序と人間の本性(P75)

アウグスティヌスにおいて、現世の営みとしての政治は神による想像の秩序を前提として捉えられる。人間は本来、神への愛と隣人愛で結ばれ、平和に生きる社会的本性を持っていたが、アダムとエヴァの墮罪以降、欲望の僕となり生きる世界へ転落し、「神の国」と「地の国」の闘争が始まる。

中世初期のヨーロッパ世界(P82)

4c 末~6c にかけてのゲルマン民族の大移動は、ローマを中心とした地中海世界の統一に終止符を打つ。ヨーロッパは混沌と化し、フランク王国等が西ヨーロッパを統合していく。一方、古代世界を残していた東ローマは尚、西方世界に政治的、理念的影響を与える。また更に一方で、カトリック教会によるゲルマン人への布教も行われた。つまり中世初期のヨーロッパ世界の関係は以下の通り。

東ローマ	ゲルマン	ローマ教会
------	------	-------

グラシウスの両剣論(P83)

この時期の政治思想の動向の理解には、ローマ教会の主張、特にグラシウスの両剣論に注目すべきである。彼は皇帝教皇主義に対抗し、世俗の権威と宗教の権利、皇帝権と司教権の分立・協働を主張した。またこれが教権と俗権の対立、論争の出発点となる。尚、皇帝教皇主義とは、皇帝が教会に対する支配権を掌握している状態である。

グラシウスによると、皇帝は永遠の生の為には聖職者を必要とし、その支配に服するべきだが、聖職者は世俗については皇帝の支配に服するべきである。然し、最後の審判の日に、皇帝の釈明を行う司教の権威の方が、皇帝の権力よりも重い。

アリストテレス主義とキリスト教信仰の調和

アリストテレスの学問は、「12 世紀ルネサンス」を通して、ヨーロッパ世界に広まる。

アリストテレス主義	キリスト教
人間の理性能力の自立。人間の完成可能性。	神の恩寵の助けが無ければ、墮罪後の人間は、 真理へは到達できない

そこで左のような対立が起こった。アリストテレス主義はキリスト教に挑戦したのである。この対立から、両者の総合へ移行された時、中世の学問体系としてのスコラ学が完成する。

普遍的権威の衰退と封建王制の発展

中世末期の 14c 頃は、二つの普遍的権威(教皇、皇帝)の衰退に代る封建王制が強化される。これにより、王制による統一的領域支配と公権力的性格が強化される。

4 章 近代国家の生誕

イタリア・ルネサンスと政治状況

ルネサンス・ヒューマニズムとは一定の思想体系ではなく、古代ギリシャ・ローマの古典研究、教育活動を意味する。この頃のヒューマニストは古典研究から古代世界の中に世俗的で活動的な生を享受する人間像を発見し、神中心から人間中心の世界観へと転換した。ここでは抽象的思弁は排され、実践的効用を目的とする哲学が説かれ、世俗的な富、権力、名声の追求も人間の自由と主体性の表現として肯定された。

他方、イタリアは文化的には優位を誇っていたが、政治的には都市国家の分立が残り、統一に程遠かった。この政治状況からマキャベリの思想を貫く世俗主義とリアリズムが生まれたと言える。それは「ライオンの力と狐の狡知」をもって、支配者の行動を倫理から解放する思想である。

トマス・モアとアイディアリズムの政治思想(P115)

ルネッサンスの時代は封建的秩序の崩壊や教会の価値観に対する批判等があり、新たな価値観を模索する危機の時代であった。その時代の政治思想がとる類型は2通りある。第一に現実を直視し、そこから平和と安定を保証する秩序を見出そうとする、マキャベリらのリアリズムであり、もう一方が、現実に対する批判を留保しつつ、完璧、最善の社会、理想国家の構想へと向かうトマス・モアのユートピアの思想である。北方ルネサンスではこのような政治思想が興る。

ユートピア思想

私有財産がない共同所有、平等の社会	計画経済
国家の役割は物の管理と計画経済の指導のみ	豊かな生活と余暇の保障
知的、道徳的に優れた人が選出されるデモクラシー	世襲、富に基づく特権身分が無い

エピクロス派とストア派倫理の共存	侵略戦争の否定
------------------	---------

ルターの宗教改革——その教義の特質

ルネサンスの文化運動は時代の支配階級、知的エリートを対象としており、民衆の生活とは離れて

いた。一方、宗教改革は民衆の意識と生活に深く浸透していた宗教のあり方を直接的に問い直す運

動であった。

ルターの教義の最も革新的な命題は、信仰義認説、乃ち人は信仰によってのみ救われる、である。

これから帰結するのは、宗教意識の個人主義化であり、そこから個人の内面生活の自立、良心の自

立がなされ、宗教の個人主義化から、宗教を媒介とする社会の結合が断たれ、中世的社会観は一層

される。ルターによって世俗的権威の地位が飛躍的に上昇した。

聖パルテルミーの大虐殺(P130)

カルヴァンの死後、ヨーロッパで激しい宗教戦争が起こる。その後、自らの信仰を擁護する為にこ

れを圧迫する君主への抵抗を正当化する文書が流布され、その作者はモナルコマキと呼ばれた。

彼らが直面した課題は以下の 2 点である。

良心を根拠とする抵抗の正当性	カトリック穏健派の支持の獲得
----------------	----------------

テオドール・ド・ペーズは「人よりも神に従え」に基づき、政治権力への服従を相対化しつつ、為

政者の義務は真の宗教の保護にあり、君主に抵抗して宗教を守る権利と義務がある事を主張した。

他方、オマンは、国王は人民を代表する身分制議会によって選出されたのであり、国王の権威に対

する議会の権威の優位を主張した。

ジャン・ボダンの主権論

ユグノーの抵抗が激しくなる 1576 年、ボダンは『国家論』を記し、国家とは多数の家族の主権を

以てする正しい統治であり、家父長の絶対的権力を強調した。彼の主権論においては、主権者とし

ての君主は封建的な階層秩序の頂点に位置するのではなく、国民が一律に服従すべき絶対的権力の

保持者となる。然し、彼が主権者の命令と定める、実定法はこれに優越する自然法を犯してはなら

ないとされた。彼が国家を定義する際に用いた正しい統治とは、これを守る範囲である。

5 章 市民革命と社会契約説 I ——イギリスを中心として

自然法思想の世俗化——その諸契機(P143)

ヨーロッパでは宗教改革、宗教戦争等が起こっていた。また経済の観点からは、絶対王政国家の重

商主義が挙げられる。グロティウスが戦争の惨禍から人類を救い、更に国際商業の自由を目指す国

際法の構築を模索し、その原理を自然法に求めた背景はここにある。

またケプラー、ニュートンらが自然科学を発達させ、人間理性の自立的能力を確信する合理主義を

発展させた。これら自然科学の発達は、ルネサンスに端を発する自然観(自然は目的論ではなく機械

的な因果法則に従うという自然観)の世俗化によって促進され、同時に自然を観察し、運動法則を抽

出する人間の理性能力への信頼によって支えられた。

グロティウスの意義と限界(P145)

グロティウスは『戦争と平和の法』において、自然法の基礎を人間の本性としての社会的欲求に求

めた。彼は、人間とは言葉を用いる理性的存在であり、それ故に社会への欲求を持つとした。この

ように宗教に人間の本性を求めない事によって、カトリック、プロテスタント両者が承認しうる自

然法の根拠を求めた。

トマス・ホッブズ(P148)

ホッブズは宗教の対立から起こった善悪の判断の主観化が、個人の良心を絶対的な規準とする支持

権力への抵抗を生み、平和に不可欠な主権の絶対性を損なわせたと主張した。

彼によると、人間は自己保存欲求に突き動かされた存在であり、また将来の貧困を回避しようと手

段を講じる生物である。その手段は身体的力、富、名声、地位といった力である。更にその力の程

度は他者との比較を免れない。それでは力の追求に限界はなく「万人の万人に対する戦争状態」と

なる。ホッブズにとって、自然権とは、人間が自分自身の生命を維持する為に自分の欲するままに

その力を用いる自由をさす。

この戦争状態を回避し、人々を平和に向かわせるものは死の恐怖等の情念、及び人々が同意する平

和の諸条項としての自然法である。ホッブズは国家の創設には以下の三つの自然法が必要と説く。

平和を求めよ	自然権の相互的、同時的放棄	信約の遵守
--------	---------------	-------

然し、彼の言う人間の本性からして、自然権が国家創設の為に放棄される事を保証する事はできな

い。そこで彼は、その履行を保証する強力な共通権力の樹立という契約を求める。

ピューリタン革命の政治思想(P157)

一方、ロックは、人間は自然権の主体として自由で平等な存在である事を認めた。また誰もが持つ自然権は、理性に基づく自然法に従って守られる。然し以下の理由から、自然状態における自然権の享受は不確実で、他からの侵害に曝されている。

確定した法の欠如	紛争の裁定者の欠如	裁定を執行する権力の欠如
----------	-----------	--------------

人々は所有権の保護と外敵からの防衛という目的から、政治社会の形成へと向かう。その場合、人は本来、自由平等なので、政治社会の形成も彼らの自由な同意、乃ち契約に基づかねばならない。こうしてロックはまず「唯一最高の権力」である立法権の行使を律法部に委ねる事を求める。ここでロックは、律法部を含む政府と国民の法的関係を捉えるにあたって、信託の概念を用いる。ここで信託違反が生じた際の抵抗権、革命権が認められる。

ロックの政治社会は、あくまで所有権の保証と対外的安全という限定された目的に従って形成される社会であり、政府は国民の内面的価値の世界を支配する事は許されない。故に当然、魂の救済に関わる宗教の問題には政治権力は介入できない。こうしてロックは、リベラルデモクラシーの政治思想の定礎者となる。

6 章 市民革命と社会契約説Ⅱ——フランスを中心として

自然法の転回——モンテスキュー

17c において自然法は何よりもまず物質的な自然界を貫く自然法則として理解された。この自然科学的思惟の優位を背景にした 17c の政治思想は社会及び国家を自立的個人による合理的所産と見做す作為の論理を生み出したが、人間事象に迄この思惟を適用する事に関する危険をパスカルらが指摘した。18c の課題は、前世紀の思惟の政治や道徳への適応の促進だけでなく、それが孕む問題についての反省でもあった。

18c とは今日に遡繋がる近代思想史上の基本的枠組みが作られた時期なのである。

モンテスキューは、自然科学的決定論に抗い、人間の精神的自由を救う為には、優れた立法者による法の制定が重要だと説く。彼は自然環境と人間精神の相互交流を通してその社会を規定する「一

般精神」を導き、政体が安定する為の条件に、一般精神と政体を支える原理の両者の合致を挙げる。

啓蒙主義者の愚民観(P190)

18c は啓蒙専制主義の様相も見せる。啓蒙主義者は、万人に備わる人間理性への信頼を唱え乍らも、実際は理性的少数者が無知な人民を指導するという愚民観、エリート主義を払拭できなかった。この啓蒙の専制はプラトンの時代にも唱えられたが、プラトンは理性を善のアイデアに求めたのに対し、この時代の理性とは専ら幾何学的理性である。

ルソー

啓蒙主義に残る愚民観は、ルソーによって一層される。ルソーにおいて初めて人民は政治の主体として自立するが、その為に彼は、啓蒙主義者が共通に抱いていた理性への絶対的信頼を放棄する事になる。彼の民主主義を支えるのは、理性への信頼ではなく、民衆の善なる本性への信頼である。理性はそれ自体、道徳的に人間を墮落させるとした。

理性の開花は、物質生活、精神生活を豊かにすると同時に、人間の市民感覚を失わせ、道徳的退廃を招く。彼が理想とした人間像は古代ギリシャのポリスの市民である。彼らが有徳だったのは、個人と社会が分裂し対立する事無く、互いに自己の利益と欲望の為に他者を欺かなかったからである。然し、理性の発達と文明化が齎したブルジョアは奢り、他者との連帯を阻まれ、他者と比較し、優越したいという欲望に規定された疎外された状態にある。ルソーはこの不幸の根本的原因を理性による人為に求め、それ以前の自然に帰る事を主張した。

このように、彼の問題意識は人間の道徳性にあった為、『社会契約論』は、単に理想的政治体を構想しただけでなく、人間相互のあるべき根源的関係をも提示した。彼は「各構成員は自分の持つ全ての権利とともに自分を共同体全体に完全に譲渡」することを求める。この契約が完成すると、共同体は一つの生物の如く共通の自我と意志を持つ。ルソーは一般意志(共同体の意志)、特殊意志(各構成員の意志)、全体意志(意志の総和)を厳格に区別し、一般意志と自己の意志とを同一視する事で、他者と緊密に結びつきつつ自由になれると主張した。

カント

カントはものが因果法則に服従している現象界と人が「汝の意志の格率が常に同時に普遍的律法の

原理として妥当しうよう行動せよ」という命題に従う叡智界とを峻別する。前者が理論理性であり、後者が実践理性となるが、この峻別は重要である。それは、幾何学的理性の支配を道徳や政治といった人間的事象に迄拡大しようとする近代の趨勢に歯止めをかける事になるからである。

7章 保守と伝統の思想

啓蒙専制主義では、封建制の様な階層的秩序よりも、中央集権化された権力による合理主義的統治を理想とした。それは絶対王政との親和性を持つ。その様子は国民皆兵や徴税機構に表れる。

実践の領域の破壊

以下では合理主義的統治の根本的問題を探るが、まず近代自然科学を担う幾何学的理性の特質は以下の三点に求められる。

- ① 感性は消極的な役割しか負わず、悟性によるカテゴライズにより初めて認識が起こる。
- ② 普遍的であり、歴史性が無い。
- ③ 自然科学的真理が唯一のものであり、他者との意見交換と言った間主観的なものとは無関係なので他者を必要としない。

このような自然科学は実践の学としての政治学とは相容れない。政治は理性と感性の協同によって認識し合う歴史的存在としての人間が相互交流する場に成立するからである。もしこの場に自然科学的一元的理性を持ち込むと、人間は単純な法則的運動を繰り返す粒子のようになり、感情面が退化してしまう。

8章 功利と自由の擁護

自由主義の危機——功利主義

功利主義の認識論的基礎付けをしたミルによると、人間の意識作用は全て感覚的活動、乃ち観念の塊に還元される。つまり、意識は外的作用の函数となり、外界からの刺激によって自由に操作できる事になる。功利主義が教育に最大限の可能性を認めるのも、外界から意識作用を操作する事で人間を正しい判断を下す合理的存在へと導く事ができると信じるからである。

ベンサムによると、人間を行動へと駆り立てる動機は道徳的善悪ではなく、快楽を求め苦痛を避けようとする人間本来の性向であり、「自然は人間を苦痛と快楽という二人の主権者の下においてき

た。」人間は快楽と苦痛の中でのみ生きている以上、善とは快楽であり、個々人の快楽の総和はその儘社会的利益となる。ベンサムは国家の任務として、個人的快楽を最大にして、社会全体の快楽を実現する、所謂最大多数の最大幸福を主張した。

一方で彼は、社会的善を最大にする為に最小の悪はどうしても必要だとして、個人を合理的人間にする為に法的拘束力に訴える。

功利主義は自由民主主義体制の確立に寄与したかに見えるが、重大な問題も孕んでいる。

功利主義において万人が平等とされるのは、人間としての尊厳を平等に持っているからではなく、同一の生物学的組織を有しているからであり、勘定される為に存在するバラバラの数とりと化している点。
内面を喪失し、原子化された人間は常に統治者による恣意的操作の危険に直面している点。

有機体としての社会

政治は、支配—服従関係であると同時に、決して唯一かつ普遍的な真理があるとは言えない人間の行為に関する最良の選択肢を求めて人々が意見を交換する実践の場であり、単なる管理へと還元する事は許されない。

J.S.ミル

ミルは功利主義の立場から教育を施され、後に苦悩に陥る。その原因は、功利主義の教育が教える幾何学的理性の背後を支える能動的自我が育たない事にある。人間を行動へ駆り立てるものは、功利主義の考える自己利益の計算ではなく、計算を超えた非合理的感情であり、それが外部からの恣意的な操作を拒む自我を成すのである。彼は功利主義の立場を離れる事は無かったが、部分的に修正する。彼によると、社会を成立させるものは、人類に備わった社会的感情、同胞と一体化したいという欲求、乃ち「共感」という非合理的紐帯である。それ故良心という内面の声が要請する正義こそ、政府が追及すべき社会的功利である。こうして彼は権力から守られた内面において実現されるべき道徳的自由の重要性を確信し、『自由論』において政治権力からの自由を論じる。

イギリス新理想主義

功利主義によって、本来自由主義を支えていた道徳的自由の意識が希薄化し、個人主義が極限迄押

し進められる。結果、個人主義に立脚していた自由主義そのものが限界に達した。ここで英国のグリーンらが新理想主義を開き、カント、ヘーゲル、プラトンに遡り、国家を再考察しようとした。グリーンは快楽を善と見做す功利主義を批判し、可能な限り人間性を完成させる事に善を見る。人間はその為の行為を発見する理性とそこへ導く意志を持つ、と主張する。そして人間性の完成という善を追求する為には、それを共通善として共同体を有する必要が合った。

9章 社会主義の衝撃

私有財産と利己心の結合が望ましくない事は古代から指摘されており、プラトンも『国家』において共産制を主張した。然し、共産主義が一つの体制としてはっきり意識されるのは近代であり、トマス・モア等はユートピアを提唱した。また市民革命時は、革命の進展の中で掲げられた自由、平等が形式的なものに過ぎず、階級差別撤廃に繋がらないと自覚された時、新たなイデオロギーとしての共産主義が見られた。例えばフーリエはファランジュという農業を中心とした共同体を提唱するが、それは商業の詐欺性を不快に感じたからである。オーウェンは労働条件の改善、工場法の制定に尽力し、アメリカにニューハーモニー平和共同体を創設しようとした。

マルクスとエンゲルス

上記の社会主義的試みは、資本主義の科学的、法則的分析の上に、歴史の必然性として示される事が無かった故にエンゲルスによって空想的社会主義と呼ばれた。

マルクスによると市民革命の本質は政治的国家からの市民社会の解放である。

中世封建社会	領主権、身分、職業団体という形で政治的要素と市民的要素が未分化
市民革命	私有財産、家族、労働という形で市民的要素を解放

これは各領域を各人の自由な恣意に委ねる事を意味し、物質主義と利己主義の完成に他ならない。ここでマルクスは、あらゆる不正を被って何ら権利を要求していない一階層、プロレタリアートの成長に真の解放の可能性を託す。

マルクスにとって、労働こそが人間の本質に属し、人間の自己発現の形態であるが、私有財産の下では以下の形で疎外が起こる。

① 労働生産物は労働者に還元される事は無く、資本家に帰属する。

② 労働そのものが自己にとって外的な強制となる。

③ 類的存在からの疎外=人間は未来を先取りし、自分自身の直接の肉体的欲求から離れ、意識的、普遍的に生産するものだが、生産物や生産過程から疎外された労働者にとって労働は単なる肉体的生存の手段となる。

④ 以上から人間は人間から疎外され、お互いに対し敵対的に存在する。

こうしてマルクスは人間存在を否定する資本主義を否定する、つまり否定を否定する事で人間の自然性を完全に回復する事を主張する。

マルクスは唯物史観を唱えた事でも有名だ。彼にとって人間は抽象的個人ではない。道徳、宗教、形而上学等のイデオロギーは現実活動する人間から発するのであり、物質的に発達する人間が思考の産物を変化させる。「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する。」

それでは資本主義は如何にして崩壊するのか。資本家は労働者を雇って生産を行うが、利潤拡大の為に機械の導入等の技術革新を導入し、能率的且つ廉価で生産する。すると機械に取って代わられた労働者は失業者となり、資本への隷属を更に強める。これは労働条件の悪化を伴い、彼らは窮乏化し、恐慌に繋がる。つまり機械化で生産は増えるが、購買力が低下し、需給バランスが崩壊せざるを得ない。こうして資本主義は矛盾を強め崩壊前夜を迎える。

レーニンと帝国主義

レーニンによると帝国主義は独占段階の資本主義であり、そこでは資本の集中、独占が進む一方、産業資本と銀行資本が融合し、金融寡頭制が成立する。更に国内の過剰生産を回避する為、資本の輸出が積極的に行われ、植民地政策を不可避にする。纏て起こる植民地争奪戦争を内乱に転化する事が革命に他ならない。

10章 現代思想の展望

ヴェーバーに寄せて

アリストテレス的伝統において、政治学はその対象が人間行動に関わる故に理論学とは別の独自の原理に基づくものとされた。

近代において自然科学が諸学のモデルとなって尚、社会科学は規範的であり続けた。

然しヴェーバーは事実認識と価値判断を区別し、社会科学が価値自由的である事を主張した。そこには、以下の時代診断があった。

それは、現代とは価値観が相対化し、「神々の闘争」しつつある時代であるという認識である。『職業としての学問』の中で、世界には多様な価値秩序が存在し、その中で価値判断を下す事は原理的に無意味なのであることが説かれる。彼によると、この価値の相対化を齎した原因はプロテスタンティズムの要請する禁欲であり、資本主義に待ち受けている将来の精神は「精神のない専門人」「心情のない享楽人」である。

価値への信仰に基づく人間関係は崩壊し、ものを媒介とする即物的関係、計算可能な関係へと置き換えられていく。その一つの極みが官僚制である。